

A-6

情報社会における承認の不安定性と自己肯定の構造：自己承認の視座

The instability of acceptance and the structure of self-affirmation in the information society: A self-reliance perspective

○澁谷隆成¹
Ryusei Shibuya¹

1. 研究背景と目的

現代の情報社会において、SNSでの誹謗中傷、高額転売、フィッシング詐欺、デマ情報、闇バイトといったネットの負の側面が顕著になっている。こうした事象の根底には、技術の急速な発展に人々の人間性の成熟が追いついていない、謂わば『発展速度の格差』があると推察できる。

過去20~30年で日本におけるインターネットの普及率は大幅に上昇し、通信・情報技術は私たちの生活のあらゆる場面に広く浸透した。2020年時点で日本のインターネット利用率は約83.4%に達し、10代後半から50代の幅広い年齢層では90%以上の利用率を記録している⁽¹⁾。

一方、価値観や人間性といった内面的要素の変化は、通常、数世代をかけて徐々に進行するものである⁽²⁾。戦後の社会変動を通じて国民の価値観が個人主義に移行したように、人間性の成熟には長い年月を要する。しかしながら、インターネットの普及からわずか20年程度の現在においては、そうした十分な変化はまだ生じていない可能性が高いと考えられる。

このような背景から、本研究では情報技術の発展と人間性の成熟の間に存在する発展速度の格差がネット上の負の事象の一因になっているという仮説に基づき、この格差を埋めるための理論的枠組みの構築を目的とする。

2. 理論

2.1 人間性の理想化と“ヒト”という存在への無自覚

本研究では、社会的役割や他者からの評価で形作られる側面を『人』、内在的な思考、経験を持つ主体としての側面を『ヒト』と区別する。

現代社会において他者や自己を認知する際、理性的・社会的・倫理的であるべきという理想的な人間像を無意識の内に認知の前提としている。この“人間性の理想化”は、個々の実態や背景を無視し、一面的な人格評価を生む。

例えば、社会的に注目される人物が不祥事を起こした際、理想像との落差に対して過剰に反応し、激しい誹謗中傷に至る事象がしばしば見られる。これは「人間は高潔であってほしい」という期待の裏返しであり、自己に対しても同様の理想像を抱く傾向がある。

これに関して、青年期における理想自己と現実自己の差異は劣等感を増大させ、過剰な自己理想が自己否定感の温床となることが明らかにされている⁽³⁾。このような自他に対する理想像の押し付けは、“ヒト”の複雑な人間性を見落とす原因となり、限定的な認知を生み出すものと解釈できる。

本研究では、人間を特別な存在とみなす前提を相対化し、自他を『理想像に照らされた人』ではなく、『現実を生きる“ヒト”』として捉える視座の必要性を指摘する。

2.2 言語的ラベリングと他者認知の圧縮構造

現代社会における対人認知は、表面的な属性や行動による即時的な評価に傾きやすく、他者の多面性や背景を十分に考慮することが困難な傾向にあると言える。特にSNSなどの非対面環境においては、犯罪者、メンヘラ、陰キャなどの単語

によって、他者の全体像を問わずに人格が一面的に規定される場面が顕著に見られる。

このような語による単純化、“ラベリング”は、複雑な情報を処理する認知コストを削減する反面、他者の人格を記号として処理し、理解の余地を狭める危険性を孕んでいる。

本来、人間の人格は過去の経験、環境、関係性などの多層的な情報によって構成されているにも関わらず、言語による記号化はその情報量を極端に圧縮し、理解の代用品として機能する。そのようなラベリングによる情報の圧縮は対象者への認識をその言葉が持つ意味に閉じ込め、結果として認知のズレや誤解、攻撃性といった問題を生じさせる可能性がある。

さらに、ラベリング論⁽⁴⁾においては社会からの逸脱的評価が本人のアイデンティティを形成・固定化し、行動様式までも変容させるとされており、近年ではこうした他者からのレッテルが本人に内面化され、自らをラベリングする“自己ラベリング”の問題も指摘されている⁽⁵⁾。他者に対する単純な認識は互いに与え合う中で自己にも投影され、理想的な人間像に満たない自分を、背景を無視して『劣った存在』として規定し、強い劣等感を生むのである。

ラベリングによる人格の記号化は、複雑な背景を持つ“ヒト”への認知を歪める。この歪みを修正する事が他者理解の阻害及び自己否定を解消する糸口になると見込まれる。

2.3 承認を得るための依存対象の歴史的変遷

人間は自己の存在価値を外部からの承認に依存してきた歴史を持つ。日本においては、古代には神仏への信仰が、中世・近世には主君への忠義が、近代には天皇への崇敬が、国民の価値意識や社会秩序を規定してきたと見る事ができる。これらの対象はいずれも各時代の『絶対的かつ庇護的な存在』として、人々がその存在からの承認を強く期待する構造を伴っていたと示唆される。

このように、絶対的な存在からの承認に依存してきた経緯から、人間は常に『誰かから認めてもらう』ことを通じて自らの存在を確かめようとする性質を持つと言える。

しかしながら、戦後、象徴天皇制への移行によって絶対的権威が失われると、人々の依存対象は国家から他者、すなわち日常的な人間関係へと移り変わっていった。

他者は神や天皇のように絶対的な存在ではなく自分と同列の存在であるため、承認を安定的に得ることは困難であると考えられる。それでも人はSNSでの高評価や対人関係における地位、役割といった他者からの承認の中に自身の価値を見出す事が多いと言える。ただしその不安定性ゆえに承認欲求は満たされにくく、結果として承認を過剰に求める行動や他者への攻撃的な反応として表出することがある。

近年の研究では、会話型AIとの対話が自己開示の場を提供し、ユーザーが自分の感情や経験を語ることが可能であることが示されている⁽⁶⁾。非批判的な応答、匿名性、心理的安全性といった条件が前提となるが、非実在の相手への自己開示は、他者依存の承認構造から距離を取り、自身の内面を見つめる媒介として機能しうる。

1: 日大理工・学部・情報

本節では、依存対象の社会的変遷を踏まえ、絶対的な他者の喪失によって承認の基盤が揺らいだ現代の構造を整理した。次節では、この不安定な承認構造を乗り越える新たな自己の支え方として、他者の承認に依存せず自己によって自己を規定する“自己承認”の可能性について理論的に考察する。

2.4 自己承認の構造と意義

人はこれまで、他者の承認を通じて自身の価値を確かめてきた。しかしながらその構造は、依存対象が他者一般から個人間の関係に移り変わった現代においては不安定であり、結果として理想像と現実の間に乖離を生じさせ、自他への否定という形で表出するようになった。

このような状況を乗り越えるためには、他者からの承認によってではなく、自らの内的視点において自分を認める“自己承認”の視座が求められると指摘する。

他者は自分とは異なる経験・価値観を持つ別個の存在であり、完全に理解しきことは不可能である。しかしながら、自らが抱く理想像と現実の差異に気づき、対象を“ヒト”として見つめ、その背景を想像的に補完しようとする行為は、相互理解への一歩であり、ラベリングが生んだ他者認知の歪みを修正する過程でもある。

これは自分自身に対しても適応できるものである。

他者に規定された自分を取り払って一人の“ヒト”として捉え直し、あるべき理想像と現実の差異を認識してもなお「これが自分という“ヒト”なのだ」と受け入れる事で自己認識の安定を促す事ができると考えられる。

差異を無意識に拒絶することが他者否定を生む。逆に、自らの至らなさを正しく認識し受け入れれば、自己否定には至らないだろう。また、他者の承認によって自らの存在を確かめようとするのなら、自ら規定した確たる自身の存在がある場合、他者の承認を渴望する事は無いであろう。

本研究で定義する“自己承認”とは、このような在り方を指す。この態度は、自らの未熟さや弱さを卑下することなく、肩書きや他者評価に依存しない“ヒト”としての自己理解へと繋がり、認知の安定性、自己肯定感の基盤となる。

また、これは他者との関係を否定するものではない。むしろ、自己を確立した上で他者と関わることで、依存的ではない開かれた関係性を構築できるようになる。SNSのような匿名性と承認欲求が過剰に絡み合う現代における他者依存を超えた自己理解の在り方として、自己承認は社会的・心理的に持続可能な自己モデルの一つに位置づける事ができる。

自他を単純なラベルで片づけず、その人の背景を推し量ろうとする姿勢が自己承認に向けた第一歩となるだろう。

本節では、“自己承認”という概念を、自己肯定感、相互理解、承認欲求の制御という観点から整理し、その理論的構造と意義を提示した。

3. 結論

他者からの承認に基づく自己認識は、現代においては不安定さを孕み、理想像と現実の差異から自己否定や他者攻撃を誘発することがある。これに対し、本研究では“自己承認”という視座を提示した。

自己承認とは、自他を“ヒト”として等価に捉え、理想像と現実の差異を自らの視点で受容し、承認を外部に求めず自己価値を認識できる態度を指す。このような姿勢は、承認欲求の制御、安定した自己肯定感、ラベリングに起因する他者

認識の修正に寄与し、SNS社会のような他者評価が過剰に作用する環境においても、心理的持続性を持った自己理解を可能にすると考えられる。

本研究では、“自己承認”の概念を相互理解・承認構造・アイデンティティ形成との関連から整理し、その意義について考察した。

4. まとめ

本研究では、現代における人間の承認欲求の不安定さと、それに代わる自己理解のあり方として“自己承認”の概念を提唱した。特に、他者に自己の価値を委ねる構造がもたらす心理的・社会的な歪みに着目し、そこから距離を取る視座としての“自己承認”の理論的可能性を探った。

まず、人が理想的人間像や肩書きに囚われ、現実の“ヒト”としての自己や他者を見誤る傾向にあることを示した。

次に、ラベリングによって他者を単純化する事で自身と他者の間に誤った認識や不理解が生じる事を論じた。

この構造を乗り越える手がかりとして、人が自己をいかに規定し認知してきたのかを歴史的背景から考察し、自己が他者からの承認に基づいて成立してきた過程を明らかにした。

以上の考察から、自他の理想像と現実の差異を受け入れ、“ヒト”としての自己をあるがままに認識する態度を“自己承認”と定義し、それが安定した自己肯定感や相互理解に繋がるという可能性を示した。

本研究の意義は、自己理解の新たな視座として“自己承認”を概念化した点にあると考える。SNSに代表される現代の過剰な承認欲求の連鎖に対して他者からの評価を前提としない自己の確立方法を提示することで、過剰な肯定・否定を減らし、ネット社会の負の事象の防止に貢献する事を期待する。

一方で本研究には限界もある。本研究では理論的考察を主軸としたため、具体的な実証研究や心理実験による裏付けは行っておらず、“自己承認”の有効性は今後の検証が必要であると指摘できるためである。また、AIを用いた自己分析についても個人差や状況によって結果が異なる可能性がある。

今後は、AIを媒介とした自己認知プロセスに関する調査や自己承認が生じる心理的条件の解明を通じて、本研究で示した仮説の妥当性を探ることが重要だと言える。

自己理解とは、“ヒト”という土台の上に自身の経験に基づいた価値観を積み重ねていく地道な作業である。その積み重ねが揺るぎない一つの形を成したとき、人は『個』を確立し、自己承認が実現するのだろう。

参考文献

- 1) “令和4年版消費者白書”，消費者庁(2022)
- 2) 坂元慶行：“「日本人の国民性調査」— 社会調査研究の最前線”，NHK放送文化研究所(2023)
- 3) 中村純子：“理想自己と現実自己の差異と自己注目が劣等感に与える影響”，大妻女子大学人間生活文化研究所(2016)
- 4) 宝月誠：“ラベリング論の検討（一）：逸脱と統制”，大阪公立大学(1973)
- 5) 佐藤恵：“社会的レイベリングから自己レイベリングへ”，ソシオロゴス編集委員会(1994)
- 6) Hashai Papneja, Nikhil Yadav: “Self-disclosure to conversational AI: a literature review, emergent framework, and directions for future research”, Personal and Ubiquitous Computing, Volume 29(2024)